

国際都市にふさわしい街づくり ～ 博覧会に併せて都市インフラ整備 II ～

■ 東山公園の整備と動物園・植物園の建設

都市計画として名古屋の公園網が決定された際、市東部丘陵地帯に森林公園の整備が計画された。計画の実現のため、名古屋市では財政難のなか公園用地・施設建設費を捻出すべく、当時の市長・大岩勇夫が先頭に立って地元地主の寄附集めに奔走。公園用地のほとんどを地元地主から無償提供を受けることができた。

昭和10年1月、東山公園の建設に着手。同年4月、東山公園の開園。続いて、園内の目玉施設として動物園・植物園の建設に着手。動物園はドイツのハーゲンバック動物園を模範に「世界に誇るに足る大動物園の実現を図る」もの。

植物園には「東洋一」の大温室を建設。東邦ガスからの寄附金が充てられた。

同時に名古屋市では、来園者の輸送のため公園前まで市電路線の延長も進め、昭和12年2月、東山公園まで市電の運転が開始。同年3月、東山公園内に動物園・植物園が開園した。



植物園

出典：『大名古屋十六景』、愛知県図書館蔵



東山動物園鳥瞰図と観覧券

出典：『新修名古屋市史』第6巻

■ 国際ホテル(名古屋観光ホテル)の建設

名古屋が国際的大都市になるには、外国人の観光宿泊に適した洋式(「近代式」)ホテルが必要であり、名古屋財界でもかねてから懸案になっていた。当時、政府は「外客誘致」を推進しており、名古屋観光ホテルの建設は国策に沿うものでもあった。このため、政府が名古屋市債を買入れるなど国の支援もあった。

土地・建物は名古屋市で用意し、名古屋財界の肝煎りで「株式会社名古屋観光ホテル」を設立して経営した。同社には名古屋市からも出資している。同社の代表者は名古屋財界の有力者で「政商」とも呼ばれた青木謙太郎(愛知時計電機株式会社の社長、のちに名古屋商工会議所会頭を務めた)。青木は名古屋市長の大岩勇夫と親しく、名古屋汎太平洋平和博覧会の協賛活動など市政に積極的に協力した。昭和11年12月に名古屋の広小路通に開業した。



名古屋観光ホテル

出典：『名古屋観光ホテル五十年史』



名古屋観光ホテル 出典：『名古屋観光ホテル五十年史』